

# 新書紹介

## 都市と交通

岡 並木著

岩波書店 新書版 二二三頁

歩行者の環境に光をあてる報告書や出版物が最近増えている。著者はよく知られているように、交通工学の専門家ではないが、都市社会の問題として、生活の現場から、この問題をとらえてきた先駆者である。本書は単なる感傷的な歩行者賛歌でも、海外事例の紹介でもない。徒歩という交通手段、快適な歩行者環境が、都市での現実の生活をするため必要不可欠な交通のサブシステムとして位置づけられている点の特徴である。

都市の交通問題については、多くの議論がなされてきた。しかし、公共輸送機関の強化や自動車への各種の制限等が実施されても、膨張する都市の生命を

かろうじて維持しているにすぎない。車を街から締めだしても公共交通機関はよみがえらず、スプロールしていく人口を追いかけていくことは徒勞であるといった現実的な観点から本書はかかっている。

一方、電車、バス、自動車道路といった交通手段やシステムは急速に進歩し、欧米に比べても遜色のないものになっているが、では何が…。著者は普通の歩行者の十倍以上のエネルギーを消耗させる駅や歩道橋の階段、不便な乗り換えなどの障害が、利用者に自動車を選択させている点を指摘している。徒歩、公共交通、道路、空港とそれぞれの交通手段を「連続的に」利用できる

方法を見い出すことが、現代都市社会のニーズに答える方法であり、各交通手段の接点、そして歩行者環境の改善が、この「連続性」を高めるとしている。「抵抗なしに歩ける距離」は、歩道に木陰をつくる。歩き易い舗装、変化のある風景によって延ばすことができる。さらに、モールや、モールへの地下鉄や駐車場の接続性を高めること、トランシットモールといわれるバス、タクシートの乗り入れを認めるもの、完全な歩車分離が難しい地区での自動車の速度を「人間の速度」並におとすボンネルフ（歩車共存）等々へ発展の可能性がある。

「接点の改良」については、バス接近表示システム、バスの運行間隔を一定にするバスロケーションシステム、相互乗り入れに伴う共通運賃制、行き先案内センサー等、また新たな歩車分離が必要となっている「自転車」については、車道幅をつめることにより得られる自転車専用レーン、効率的な駅前自動車の置き場などが、実行されたものの反省を踏まえ解説されている。

また、最近バス停に屋根がつけられるようになったが、歩道上にあるこのシェルターは、建設省の通達によりどの都市でも三メートル以上の高さになり、風防ガラスも、ベンチもおくことができぬ。実際には、雨や強い日ざし、風の中で立ちん坊の疲労感が「連続性」をまたげている。大阪市天王寺町のバス停は、この通達には沿わないが改良され、非常に評判がよいという報告があり、こうしたことごとくが利便性を増すという事実と、反面、制度の硬直化を示している。歩行者、利用者が「どうして使いにくいのか」と思う点について、現在の料金・施設に関する法律制度、行政の矛盾を明解についている。

著者は、これらの具体的な改善を求める一方で、今後の都市構造のあり方について、「職住近接か職住分離か、自動車か公共交通か、歩行者か自動車利用者か、開発か自然保護かといった二者択一の対立概念で、私は都市問題を考えたくない」と述べ

既成市街地にもう少し快適に歩くことができる空間を創り、人々がこれ以上郊外へ脱出しなくてすむように、郊外へ出ていった人々を呼びもどし、都心や都市内の市街地ごとに夜間人口を高めていくことを主張している。これは一九七四年に、ニューヨークを舞台に書かれた、「THE PEDESTRIAN REVOLUTION」(邦訳「歩行者革命」鹿島出版会)と、視点を同じくするものである。当時のアメリカの都心部の荒廃とエネルギー危機による車社会の反省を踏まえて書かれたものであるが、今日東京や、ここ横浜でも都心の空洞化、今後予想される内側へのマンション・スプロール、スラム化に対し非常にタイムリーな指摘であると思われる。本書では、日本での実情にあった都心の更新、住宅建設と歩行者環境といった点について十分論ぜられていないのが残念であるが、前掲の本を比較参照しながら読むことを勧めたい。

企画調整局企画部都市デザ  
イン担当 北沢 猛